



2

【ひろばの風】

聖カタリナ讃歌につつまれて
聖カタリナ大学短期大学部 学生部長
日野 幸子



3

【Campus News】

松山赤十字病院と看護学科（仮称）
設置に関する協力協定を締結
『留学生交流イベント』へ留学生が参加
軟式野球部が
平成27年度春季リーグ戦で準優勝
ほか



4

【Campus News】

第13回ボランティアーウィークを開催
キャリアデザインで
ライフデザイン出張講座を開催
松山まつり「野球拳踊り」で
南海放送賞を受賞
ほか

5

【ESSAY】

精神保健福祉士養成教育への思い
人間健康福祉学部 村上 佳子



カタリナ ひろば

Vol.28 No.1
2015.11

聖カタリナ大学
聖カタリナ大学短期大学部
www.catherine.ac.jp



6

【ゼミナールインタビュー】

人間健康福祉学部
大黒屋 貴穂ゼミ



7

【ようこそ就職課へ】

決して諦めるな!!
～憧れを目標に～
就職課長 井上 尚幸



7

【クラブ紹介】

ダンス部

部長 社会福祉学科3年
森川 桃江さん

8

【教員著書紹介】

行政救済法論

山本克司（聖カタリナ大学教授）
：成文堂、2015年

玉川の文化史 一六玉川の古歌と風土一
玉井 建三（聖カタリナ大学 副学長・教授）
：創風社、2015年





聖カタリナ讃歌につつまれて

聖カタリナ大学短期大学部 学生部長

日野 幸子

平成27年4月3日、聖カタリナ大学第28回、聖カタリナ大学短期大学部第50回入学式が執り行われました。この厳粛な式は、保護者の方々をはじめ、新入生にとりまして新たな門出を祝う時間であり、教職員及び大学関係者にとりましても、未来を担う学生たちと共に歩む期待と責務に心引き締まる場であります。式次第が一つひとつ進行して行き、キャンドルサービスの光の中で入学生の宣誓が行われた後、聖歌隊による『聖カタリナ讃歌』の合唱で入学生を歓迎します。眩いばかりのキャンドルとともに『聖カタリナ讃歌』が参列者全員をつつみ込んでいきます。この大切なセレモニーで毎年無事歌い終える聖歌隊に心からの拍手を送る者として、ささやかではありますが私の想うところを記してまいります。

聖歌隊の歌う『聖カタリナ讃歌』は実に美しく凜々しい素晴らしい曲です。誠に僭越ながらその理由を音楽的視点から辿ってみますと、すぐに気が付くのが三部形式という分かり易い構成（『聖カタリナ讃歌』の場合は急-緩-急の構成）です。清楚で知的なメロディー、借用和音による効果的な和声進行、弾む付点リズムと中間部のレガートなリズムとの対比等、華麗さと優美さを醸し出す様々な要素が織り込められているといえましょう。そこにスペイン語の歌詞が見事に溶け合い、聴く人々に心地好い高揚感を与えます。『聖カタリナ讃歌』は進るような情熱を秘めた曲であり、演奏する側もその魅力に引き込まれていく程です。ただ私は常日頃から素朴な疑問を持っておりました。この壯麗な『聖カタリナ讃歌』をいつ、どなたが、どのような背景のもとに作られたのでしょうか、という疑問です。作者への崇敬の念をもって今回思い切って私なりに調べてみたところ、「分からぬ」ということが現状での結論です。フィリピン、もしくはスペインの聖職者の方がお作りになられたらしいという言い伝えもあるようですが、楽譜を編まれたのが先なのか、曲名或は詩が先なのかさえ知り得るまでに到りませんでした。しかしいずれにせよシエナの聖女カタリナを讃え、後世にまで残される表象芸術であることは確かです。

聖カタリナ学園草創期の沿革を遡ってみると1924年（大正13年）松山美善女学校設置認可、1930年（昭和5年）松山商業実践女学校と改称、翌1931年（昭和6年）松山商業女学校と改称、1942年（昭和17年）松山女子商業学校と改称、1947年（昭和22年）学制改革により併設新制中学校（～1965年）発足、1948年（昭和23年）松山女子商業高等学校設置認可という流れの中で、併設新制中学校で既に『聖カタリナ讃歌』は歌われていたということです。何かのきっかけで分かることがあるかもしれません、私自身むしろこの「分からぬ」ということにある意味憧憬を伴った口マンを搔き立てられるのも事実です。

現在聖歌隊は全学から募った学生たちとシスターの先生方とで構成されています。音楽の教員がその指導に当たっており、発声、読譜、歌詞の発音等々、真剣な練習が続いています。ただ授業の合間にぬっての練習のため、十分な時間が

取れないのが悩みであり、また毎年のようにメンバーを入れ替わる為、その都度再スタートを切らなければなりません。譜読みの段階から本番までの道のりを思い不安がよぎることもありますが、聖歌隊メンバーはひとりひとりが真摯な気持ちで練習に励み、そして何より『聖カタリナ讃歌』の美しさに魅せられて見事に歌いこなせるようになっていきます。入学式前日、聖カタリナホールでのリハーサルで、学生たちの緊張感は徐々に高まり、集い合った「合唱団」は心一つにいよいよ『聖歌隊』としての自覚を深めていくのです。

入学式当日、聖歌隊はパイオルガンの前に立ってキャンドルを手に歌います。伴奏者はピアノの斜め上方で歌う聖歌隊をステージから支えます。美しい音楽を聴きながらも冷静に弾き続ける役目です。ただ注意すべきことがあります。指揮者なしの合唱と伴奏のみでの演奏形態を取りながら、聖カタリナホールという想像を超える豊かな残響のあるホールで演奏する場合、双方にズレが生じないように、聖歌隊は残響を扱い潜ってきちんと伴奏の拍に合わせることがポイントとなります。伴奏も聖歌隊を瞬間、瞬間でリードしながら合わせていきます。演奏中、この点が最も集中力を要するところです。聖歌隊は『聖カタリナ讃歌』の美しさを余すところなく入学生に届けるよう、最後の一音まで無心に歌い進めます。精魂込めた演奏を終えた時、それはまさに保護者シエナの聖女カタリナにつつまれたような至福の瞬間と言えます。

これからも聖カタリナ大学及び聖カタリナ大学短期大学部の発展とともに、入学式もさらに回を重ねていくことでしょう。そろそろ聖歌隊も来年度の『聖カタリナ讃歌』の練習・準備に取り掛かる時期になってきました。「Charity for Your Neighbours ～あなたの隣人を大切に～」のスクールモットーを胸に、保護者シエナの聖女カタリナに見守られながら、歓びと感謝をもって来年もまた精一杯の歌声を響かせることができますことを心から願うものです。

＜参考資料＞

- ・『聖ドミニコ宣教修道女会 日本支部 松山修道院 創立史』
編集 聖ドミニコ宣教修道女会日本管区
発行 1991年（平成3年）5月24日
- ・創立八十周年記念誌「しらゆり」2005 No.67
編集者 安田逸美/田中千晶/渡邊日出夫/黒田浩子
編集人兼発行人 聖カタリナ女子高等学校
発行 2006年（平成18年）2月24日

＜謝辞＞

『聖カタリナ讃歌』の作者につきましては、多くの方々から貴重なお話を賜り心より御礼申し上げます。聖ドミニコ宣教修道女会ローマ本部の方々、シスターの方々、聖カタリナ女子高等学校及び聖カタリナ大学、聖カタリナ大学短期大学部教職員の方々には深く感謝申し上げます。有難うございました。

松山赤十字病院と 看護学科(仮称)設置に関する協力協定を締結

5月20日(水)、松山赤十字病院(院長:横田英介)と学校法人聖カタリナ学園(理事長:中田婦美子)・聖カタリナ大学(学長:ホビノ・サンミゲル)は、聖カタリナ大学に設置計画中の看護学科(仮称)の設置と運営に関する協力協定を締結いたしました。

設置計画中の看護学科は、松山赤十字病院の協力を得て、地域の健康福祉保健のニーズに応え、社会の持続的発展に貢献することを目的としたものです。

看護学科の入学定員(予定)は、80名(男女共学)。収容定員は320名。設置予定年度は、平成29年4月。平成28年3月に文部科学省に設置認可の申請を行い、同年8月に認可の予定。



『地域交流イベント』へ留学生が参加

留学生と北条地区まちづくり協議会との地域交流イベントに韓国と台湾からの留学生が参加し、地元の方々との交流を深めました。

開催日	内容
5月4日 (月・祝)	松山市北条の鹿島にて開催された『北条鹿島まつり(大しま縄張り替え体験)』に、留学生19名が参加し、地域の方々と交流を深めました。
5月23日 (土)	北条で開催された『日本の農家体験』に、留学生11名が参加し、地元の農家の方に指導を受けながら様々な農作業を体験しました。
6月7日 (日)	松山市北条にあるコーヒー豆専門店イエムラコーヒーさんによる『コーヒー教室』が北条地区まちづくり協議会主催で行われ、留学生23名が参加しました。まず始めにコーヒーの知識を学び、その後コーヒー豆を焙煎する貴重な体験を通して、地域の方との交流を深めました。
6月14日 (日)	北条駅前で開催された『かざはや楽市』に、留学生4名が模擬店を出店し、韓国のお菓子などを販売しました。民族衣装での接客は、来場者にも好評で、準備したお菓子などは全て完売しました。
6月21日 (日)	大学近隣の水田を活用した『田植え体験』に、留学生9名が参加し、地元の方々と泥まみれになりながら交流を深めました。
9月23日 (水・祝)	松山市北条の鹿島で開催された『鹿島清掃＆バーベキュー』に留学生24名が参加し、地域の方々と交流を深めました。



軟式野球部が 平成27年度春季リーグ戦で準優勝

本学、軟式野球部が四国地区大学軟式野球連盟、平成27年度春季リーグ戦において創部初の準優勝を飾りました。

6月6日(土)(於:香川県牟礼球場)に行われた優勝決定戦(決勝戦)では香川大学に9-3で敗れ、春季リーグ戦の優勝と全国大会への出場は叶いませんでしたが、初の準優勝を成し遂げました。

また、8月14日(金)～16日(日)に行われた「第5回夏のセンバツ!全日本軟式野球記念大会」にも東西国地区代表として出場し、準優勝に輝きました。



おでかけキャンパス inエミフルMASAKIを開催

6月14日(日)に出張型のオープンキャンパスとして、「おでかけキャンパスinエミフルMASAKI」をエミフルMASAKIのグリーンコートで開催いたしました。

当日は、各学科・専攻の体験コーナーや、学科やサークルなどの学生発表コーナーが設けられ、沢山の方にご来場をいただきました。ありがとうございました。



剣道部女子が四国地区大学総合体育大会 (四国インカレ)で優勝

6月21日(日)、松山大学御幸キャンパスメインアリーナで行われた第66回四国地区大学総合体育大会の剣道競技において、剣道部女子が優勝を飾りました。



第13回ボランティアウィークを開催



7月11日(土)に第13回ボランティアウィーク公開イベントが開催されました。

天候にも恵まれ、午前の部の目玉イベントである講演会「夢をかたりな」には、たくさんの方にご来場いただき大盛況のうちに終了しました。これからもボランティアセンターは地元の方々と、より繋りを得たいと思っています。

また、初の野外ミニコンサートではダンス部をはじめ、学内サークルが午後の部を賑わしてくれました。

北条のもう一度行きたいお店として注目されている「カルコバカレー」や「イエムラコーヒー」にも出店していただき、福祉施設のバザーやフリーマーケット、七夕募金等、多くの募金にご協力いただきました。

ご来場いただきました皆様を始め募金活動にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

当日、各ブースの募金箱等へいただいた募金及び収益金は、被災地NGO協働センターとまごころ銀行(松山市社会福祉協議会)に寄付させていただきました。

キャリアデザインで ライフデザイン出張講座を開催

7月21日(火)キャリアデザイン(聖カタリナ大学)の授業で、愛媛県とNPO法人ワークライフ・コラボの主催によるライフデザイン出張講座が開催されました。

ライフデザイン出張講座とは、平成27年度愛媛県地域少子化対策化事業「えひめの次世代を担う親子づくり推進事業」の一環で、近い将来、親になる可能性のある大学生を対象に、自らのライフデザインを考え、将来、結婚して家庭を持ち、子育てをイメージする機会づくりを行うことを目的とする講座で、愛媛県とNPO法人ワークライフ・コラボが連携して実施している出張講座です。



松山まつり「野球拳踊り」で 南海放送賞を受賞

8月8日(土)に開催された松山まつり「野球拳踊り」団体連の部で、聖カタリナ学園連が南海放送賞を受賞しました。

また、「まつこいパーク」で出店した本学と聖カタリナ女子高等学校との連携のブースには、8月7日(金)～8月9日(日)の間たくさんの方々にご来場していただき、大盛況のうちに終えることが出来ました。



当日の収益は、まごころ銀行(松山市社会福祉協議会)に全額寄付させていただきました。

ご来場いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

松山市長より平成27年度松山市福祉大会において表彰状を拝受

9月3日(木)に平成27年度松山市福祉大会において、松山市長より本学学生ボランティアセンターが地域福祉活動功労団体として表彰されました。



美作大学(岡山県美作市) ボランティアセンターを歓迎

9月10日(木)美作大学ボランティアセンターの学生12名、職員2名が来学されました。本学から、学生ボランティアセンターメンバーのうち20名および教職員等3名がお迎えしました。



まず、学内を案内し、その後、教室においてアイスブレイクに始まり、互いのボランティアセンターの状況について話し合いました。特に、学内での広報の仕方や地域での活動に関しては、互いに得るところが大きかったです。

こうした他大学のボランティアセンターの学生と交流することは初めての試みであり、今後も交流を継続することにより、本学ボランティアセンターの活動の活性化につなげていきたいと思います。

精神保健福祉士養成教育への思い

人間健康福祉学部 村上 佳子

今年4月から聖カタリナ大学で教員として勤務しております村上佳子と申します。よろしくお願いいたします。専門は社会福祉学、中でも精神障害者福祉領域です。初めは子どもたちの未来を応援したい思いで社会福祉を志したのですが、いろいろな出会いに恵まれ、精神科病院で精神医学ソーシャルワーカー（現：精神保健福祉士）として勤務した後、精神保健福祉士（以下、PSW）養成教育に携わってきました。精神という言葉がつくと、社会福祉を学ぶ学生であっても特別と感じるようですが、PSWも社会福祉学を学問的基盤とし、相談者がこころの病によって生じた様々な生活課題にその人らしく取り組み解決していく過程に関わる専門職です。PSWを目指していく中でも、ソーシャルワーカーを目指す学生、例えば高齢者福祉に関わるソーシャルワーカーになるなら、高齢者自身はもちろん、その介護者である家族のメンタルヘルスの課題も重要ですので、ぜひ多くの学生に关心をもってもらいたいと思いながら授業を行っています。

さて、そんな私の今一番の楽しみは、母と旅に出ることです。旅と言っても「飛行機には乗りたくない。」と言って譲らず、さらにひどい腰痛がある母と訪れるのは、時間と距離を考えて京都が定番です。腰に負担がかかるため、片道4時間の道のりも2日がかりです。これまで何度も訪れていますが、満開の桜も美しい紅葉も観たことは無く、目にするのはどうにか踏ん張って咲いている桜か青もみじです。カラカラと涼しげな氷の音をたてて葛きりを食べたのは、京都の夏の暑さを全く感じない頃でした。と言うのも、人の波にのって歩くことが出来ないため、敢えて閑散期を選んでいるからです。京都もこんなに人がいない時もあるんだと感動し、自分たちのペースで歩き、行列に並ぶことなくお茶の休憩をし、日頃サスペンスドラマをよく見ている母とロケ地を巡る、そんなとほけた旅が私の喜びです。

そんな旅の中で、よく母と笑い話で思い出す旅があります。ある時テレビで、世界中から著名人たちが何度もお忍びで訪れるという庭園が紹介されていました。「日本の美」「わびさびの世界」がそこにはあるという語りに、これは母を連れて行かなければと思い準備を重ね、ようやくその場所に行くことができました。ここに母を連れてくることが出来たと感動しながら歩みを進めていると、隣りの母が庭園の途中に見える門を指差し、「あそこから出られるんじゃない？」と言うのです。一瞬、母が何を言っているのか分からぬでいると、「もう見た。おんなじようなもの（風景）ばっかり見てもつまらん。」と言ったのです。「もしもし？ここは世界中から著名人がお忍びで訪れるようなとこなんよ。」と言ってはみたものの、「つまらん。」と押し通すのです。結局、母には休憩場所で待ってもらい、せつかくなので私だけが散策を続ける始末でした。

私は、この思い出話をよく授業で用います。社会福祉を学ぶ心優しい学生たちは、笑いながら「先生、残念だったね。」と慰めてくれます。その優しさに癒されつつ、いよいよ授業

の本題に入ります。「これが、あるPSWが行った相談援助の例え話だとすると、皆さんどう考えますか。ここでいう旅はその人の人生であり生活であると捉え、母が相談者、私が支援者であるPSW、庭園に行くのが支援目標とするなら、どう考えるかグループで話し合ってください。」そんな私の問い合わせに、さっきまで優しく微笑んでくれていたPSWのたまごたちからするどい指摘が飛びます。「相談者の希望（ニーズ）を聴くことなく、目標を設定しているんじゃないかな。」「つまらないと言うお母さんを残したまま散策を続けたのは、本人不在の支援を続けているように思う。」このような指摘に、学生たちはPSWとしての視点を着実に身につけてきていると感じます。笑顔で頷き、容赦なくどんどんやってねと指摘をさらに引き出します。なぜなら、学生たちが将来PSWとして生きていけるか否かは、その指摘を自分自身に向け続けることが出来るか否かにかかっているからです。

PSWは、相談者に真摯に関わる経験をつめば積むほどに成長していく職業です。ただ、他人の生活や人生に関わるのは容易なことではありません。その難しさゆえに援助の大原則であるいわゆる「自己決定の原則」を盾に、相談者の自己決定する力を引き出す関わりをすることなく、「どう考えるかはその人次第、私には分かりません。」と逃げ腰の援助を見受けることが少なからずあります。

何十年も一緒に暮らしている家族でさえ、またそれがたかが旅であったとしても、本人にどこへ行って何をしたいのか聴かなければ分かりません。ましてや、人生において望まずこころの病となつた人々の思いは、決して聴かずには分かることは無いのです。まだまだ聴かせてもらえてないんじゃないかと、自らに問い合わせられるPSWを育てていきたいと思っています。

ゼミナールインタビュー

人間健康福祉学部

大黒屋 貴穂ゼミ

Q1：ゼミのテーマを教えてください。

私のゼミは、知識社会学をテーマとしています。知識社会学とは、社会の変化と関連付けながら「知識」のうつりかわりを研究する社会学の一分野です。ここでいう「知識」とは「ある社会において人々が知っているものすべて」を意味しており、学問的な知識のみならず、常識や価値観、偏見等もふくむ非常に幅広い概念です。本ゼミでは、こうした「知識」のうつりかわりを、実際にデータを調査することによって明らかにすると共に、社会の変化と関連付けながら説明することを、メンバーに対し求めています。

Q2：ゼミの特徴を教えてください。

本ゼミでは、メンバーは各自がテーマとする「知識」のうつりかわりに対して、「内容分析」という手法を用いてアプローチします。「内容分析」とは、テーマに関連する新聞記事や雑誌記事を数十年分収集したうえで、それらを時系列に沿って読み込み分析することにより、「知識」のうつりかわりを明らかにする手法です。過去にゼミ生がとりあげたテーマとしては「戦後60年にみるアイドル像の変遷」「フリーターに関する言説のうつりかわり」「ゆとり教育に関する評価の変化」「健康ブームの起源とその行方」等があります。



Q3：ゼミのスタイルを教えてください。

ゼミ生は各自が興味・関心のあるテーマについて、文献やデータを調査します。その結果をレジメにまとめ、発表します。発表スタイルは自由な場合もあれば、パワーポイントにまとめる場合もあります。発表後は、質疑応答や議論をおこない、テーマに関する理解を深めます。こうした一連の過程を通じて、プレゼンテーション・スキルやディスカッション・スキル、レポート・卒業論文を作成するスキルを習得してもらいうことがねらいです。

人間社会学科3年 山崎 智仁

このゼミは、知識社会学に関して深く学ぶことができるゼミです。知識の移り変わりを勉強していく中で、その時代の価値観や常識を知ることのできるとても興味深い分野です。ゼミでは、自分の関心のあるテーマを選び、その知識の移り変わりについてデータをとり、発表することがメインとなります。そしてそれらは卒業論文執筆の練習にもなるので、文章力は確実に上がります。



大黒屋貴穂
ゼミは
こんなゼミ

ようこそ就職課へ

決して諦めるな!! ～憧れを目標に～

就職課長 井上 尚幸

一般企業の採用活動も後半戦になっています。2016年卒業生からは、採用スケジュールが大きく変更となっています。採用広報開始の時期が、従来の「3年生の12月」から「3年生の3月」へと3ヶ月後倒しとなり、選考スタートは「4年生の4月」から「4年生の8月」となりました。しかしながら、それは一部大手企業間での協定であり、地場企業では5～6月に「内々定」を出している企業も沢山あるということが現状です。本学においても、5月後半から「内々定」をもらっている学生が増えています。ただ、3月から就活をしている学生とまだまだ動けていない学生に二分されていることも現状です。また、夏休み返上で会社訪問をしている学生やきちんと夏休みを取っている学生と考え方も色々ですが、全体的に学生の行動は早いとは思われません。

今年度前半戦の就職戦線の特徴として以下のようなことが上げられます。

第一に、昨年度は最終就職率が大学97.0%、短期大学部は2年連続100%とともに過去最高という数字でしたが、内定率だけでなく内容も変わってきています。銀行、信用金庫をはじめ大手損害保険会社の事務職など前年度とは異なった先での内定者が出ており、今年度も、当然のことながら、ネームバリューのある企業も含めて、学生の目指したい業種、職種での内定奪取のために就職課全員が学生の皆さんをサポートしております。採用広報開始が3ヶ月後倒しになったことで、内々定者数はこれからというところですが、昨年度・今年度の内定状況が現3年生以降に大きく影響してくるであろうと思われます。

第二に、大学に直接送られてくる紙ベースでの求人件数は8月末現在大学においては昨年比105%、短大においては122%であり、学生は多くの求人の中から数多く選択できる状況であります。福祉系専門職を考えている学生については、これからが本格的に就活する時期であり、短大についても、実習を終えたこれからが本番となります。大学・短大共に、学生本人の活動次第で結果が期待できます。

第三に、学生へ情報提供の手段として、携帯電話やメールでの対応を積極的に実施しています。求人先の情報提供や履歴書指導等幅広く迅速な対応を実施することで「質」の向上を目指しています。しかしながら、いくら連絡しても連絡がとれない学生がいることも事実です。「就活が思うようにならず気分的に落んでいる」、「何がしたいか分からない」等の理由があるようですが、そんな時こそ、就職課に声をかけてもらいたいと願っています。逆に、数ヶ月間の就活で、スタート時の本人とは見違えるような学生も沢山出てきていることも事実です。「就活は人を育てる」とも言われています。新卒の今こそ、自分を高く売り込む最大のチャンスと捉えて欲しいと思っています。

さて、採用広報時期が3ヶ月後倒しとなった今年度、協定を結んでいない地場の企業は大手企業の対応の仕方に注目しています。1年～3年生の学生さんにとっては、のんびりできる時間が増えたわけではなく、就活に入るまでに十分な準備をする必要があることを認識することが大切だと思っています。日頃、ガイダンス等で学生の皆さん方に考えて欲しいと言っていることは、「自分自身を知り自分の理想を目標とすること」、「問題解決思考・コミュニケーション能力を磨き、自ら考え行動する主体性を伸ばすこと」を特に強調しています。

企業(事業所)は、変化の激しいこの時代を生き残るために、変えてはならない伝統と自ら求める変革とのバランスを保ちながら、まさに、「守・破・離」の精神で、選ばれ競争の中で戦っています。

今、学生の皆さん方に求められることは「何事に対しても、決して諦めない」強い気持ちと行動力で、自分自身の目標を実現することだと思っています。

クラブ紹介

ダンス部

私たちダンス部は、男子5名、女子18名で顧問の大上紋子先生のもと、火・木の週2回の練習に励んでいます。主な活動の場は、大学祭や学内クリスマス、オープンキャンパス等でのステージ発表と、大学近辺の福祉施設やお祭りなど、地域イベントへの参加です。そして、毎年恒例の一大イベントとして、松山まつりでの野球拳おどりがあります。野球拳おどりにはダンス部だけでなく、一般の学生にも参加者を募り、毎年大人数で参加しています。今年は、聖カタリナ女子高校の生徒25名の参加もあり、同じカタリナ学園



としての一体感を感じることができました。そして、今年も南海放送賞を受賞することができました。

部員の中にダンス経験者が少ないので、昨年度より外部講師として、卒業後、ダンス指導者として活躍されている先輩に定期的にご指導いただいている。大学祭や学内クリスマス等で踊るダンスは、自分たちで創作しており、主なジャンルはヒップホップとガールズヒップホップです。中には、ロックダンスやブレイクダンスをしている人もいます。

先輩・後輩の仲が良く、とても楽しい部活なので、ぜひ一度ステージ発表や練習を見に来て下さい。みなさんの入部を心待ちにしています。

部長 社会福祉学科3年 森川 桃江

行政救済法論

山本克司 (聖カタリナ大学教授)
:成文堂、2015年

行政救済法論

後藤光男 編著

大河原良夫 山本克司
山本英樹 大内理沙
高島 慶 鹿田雅一
平岡草夫 北原 仁
三浦一郎 田中大輔
鈴井寿美 藤井正希
秋葉丈志 村山眞子
片上孝洋 上原陽子
根本哲一 竹崎千恵

成文堂

『行政救済法論』(成文堂、平成27年3月出版)は、損失補償や国家賠償などの「国家補償」に関することや行政不服申立てや行政事件訴訟など「行政争訟」に関する事柄を学習するために執筆されたものです。編者は、早稲田大学社会科学部教授の後藤光男先生です。私は、本書において、第2講の「行政不服申立て」を執筆しました。行政不服申立てとは、行政(国の機関や地方公共団体など)が法に基づいて行った行為が私たちの人権や権利侵害をした場合に、行政に対して不服を申立てる制度です。この制度は、「行政不服審査法」という法律に基づいています。私は、行政不服申立ての制度の概要と根拠法である「行政不服審査法」について、執筆しました。

私たちの社会において、行政活動は非常に多岐にわたります。一般に、行政活動の広範さを表す表現として、「行政は宇宙開発からゴミ集めまで」といわれています。この広い活動は、様々なところで私たちの生活とかかわる反面、私たちの人権や権利を侵害することがあります。たとえば、聖カタリナ大学の〇〇学科の設置が、文部科学省の恣意的判断で不可とされた場合を考えてください。聖カタリナ大学の経済活動の自由という「人権」が侵害されます。このような場合、黙って従うことはないでしょう。必ず、不服を申立てます。この方法や根拠となる法律について記述したのが本書の私の担当箇所です。「旧行政不服審査法」は、制定されてから長い時間が経過し、現実に合わないことが多々ありました。

そこで、今回この法律が改正され、「改正行政不服審査法」が制定されました。

行政不服申立ては、私たちの社会のなかで、いたるところで発生しています。私は、行政とかかわる人の人権がしっかりと守られ、誰もが幸せになれる(自己実現できる)社会のために、この本を執筆しました。

玉川の文化史 一六玉川の古歌と風土一

玉井 建三 (聖カタリナ大学 副学長・教授)
:創風社、2015年

玉川の文化史

-六玉川の古歌と風土-

玉井 建三



いつの時代でも、大地に社会生活を営み暮らして、世の中を丸くおさめようとする知恵を、民衆はもっている。とりわけ、知に劣る民衆であっても、自然の心得だけはよく復習して、雑然とした集合体から、暮らしの場に表情を変える里にしてゆく。そうしたところに、他国人には見えない玉川の焦点がかくされている。山野を逍遙する教養のある高貴な人たちのみが編んだ六玉川に関する文献だけでは、真の文化風土はみえない。民衆にとって文字なき時代では、文献でのこさない土着のまじめな生活姿勢も、その時代の価値を生む一等資料になる。こうした玉川の流伝について、玉の系譜と文化受容、玉工の細工あと、古社寺に宿る玉、丹生と水銀、茶道と玉川、開拓地の玉川など、全国各地の玉川を訪ね調査した。また『万葉集』に編まれた玉は三百数十首。玉をちりばめることによって歌のまろやかさを一層引き立たせており、角がなく光り輝いて、すべての人に受容されるという、玉本来の思想にも結びつき、歌の世界を超えるような、時代のやわらかさ、まろやかさがある。なかでも、六玉川が古今を通じて名高いが、詩歌や謡曲に語られる日本古来の風姿と合わせて、北は北海道から南は沖縄県まで、玉川をてがかりに、先人から受け継がれ、語られてきた玉川の語源とその流域の生活姿勢を知り、日本人のなかに息づいている歴史と文化を身近に感じながら、現代科学の一方法で整理し編んだのが本書である。



学校法人 聖カタリナ学園

聖カタリナ大学

カタリナひろば vol.28 No.1

編集・発行
広報委員会

〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地
TEL (089) 993-0702 (代)
kouhou@catherine.ac.jp